

2016年度博士学位申請論文

行為としての沈黙についての語用論的考察：
解釈の枠組みの構築に向けて

種市 瑛

立教大学大学院
異文化コミュニケーション研究科

目次

論文要旨

目次

表目次

図目次

補遺目次

宣誓書

トランスクリプト記号

第1部 行為としての沈黙を解釈する枠組み

第1章 序論

1.1 研究の背景

1.2 研究の目的と意義

1.3 論文の構成

第2章 先行研究

2.1 言語行為論にもとづく沈黙の解釈

2.1.1 言語行為論

2.1.2 言語行為としての沈黙

2.2 ポライトネス理論にもとづく沈黙の解釈

2.2.1 ポライトネス理論

2.2.2 ポライトネス・ストラテジーとしての沈黙

2.3 語用実践行為にもとづく沈黙の解釈

2.3.1 語用実践行為

2.3.2 語用実践行為としての沈黙

第3章 語用実践行為としての沈黙の分類

3.1 話者交替の視点から見た沈黙

3.1.1 分類

- 3.1.2 特徴
- 3.2 相互行為の視点から見た沈黙
 - 3.2.1 聞き手志向の行為としての新たな沈黙の分類
 - 3.2.2 相互行為として見る沈黙の特徴
- 3.3 沈黙の解釈に見られる多義性と多層性
 - 3.3.1 沈黙の新分類にもとづく分析事例 1
 - 3.3.2 沈黙の新分類にもとづく分析事例 2
- 3.4 沈黙の分類

第2部 行為としての沈黙に見られる多義性と多層性の実証的分析

第4章 談話データにもとづく沈黙の解釈

- 4.1 沈黙の解釈
 - 4.1.1 行為と行為者の分析
 - 4.1.2 沈黙の解釈者と解釈の視点
- 4.2 談話データの比較分析の方法
 - 4.2.1 研究協力者
 - 4.2.2 データ収録の方法
 - 4.2.3 データ分析の方法
- 4.3 異なる解釈者による沈黙の行為と行為者に対する解釈の比較
 - 4.3.1 沈黙の行為に対する解釈
 - 4.3.2 沈黙の行為者（沈黙者）に対する解釈
- 4.4 事例分析に見られた沈黙の解釈の多義性
 - 4.4.1 沈黙の行為と行為者の解釈に見られた多義性
 - 4.4.2 解釈者が沈黙を解釈する際の視点
- 4.5 談話データに見られる沈黙の解釈の多義性

第5章 トランスクリプト作成課題にもとづく沈黙の解釈

- 5.1 トランスクリプト作成者とトランスクリプトの関係
- 5.2 トランスクリプトに見られる沈黙

5.3 トランスクリプト作成課題

5.3.1 トランスクリプト作成者

5.3.2 データ収集の方法

5.3.3 分析の視点

5.4 トランスクリプトに書き起こされた沈黙の比較

5.4.1 記述の有無

5.4.2 長さ

5.4.3 位置

5.5 トランスクリプト作成者による沈黙の解釈

第6章 結論

6.1 沈黙の解釈に見られる多義性と多層性

6.2 本研究の問題点

6.3 今後の展望

補遺

参考文献

謝辞

要約

本研究は、従来の「話し手」中心の沈黙研究を批判的に概観し、新たに「語用実践行為 (pragmatic act)」(Mey, 2001)の視点にもとづく新たな沈黙の解釈枠組みを、沈黙の分類の刷新という形で提示することを試みた。またその枠組みの妥当性を検証するとともに、会話参与者、トランスクリプト作成者、および研究者がどのような解釈枠組みの中で沈黙を捉えているのかを明らかにするために、3者に見られる共通点と相違点、傾向について比較、分析、考察を行った。具体的には、以下の通りである。

第1章から第3章までの第1部では、まず先行研究を概説するとともに批判的に検討した上で、本研究が依拠するMey (2001)による「語用実践行為」という視点を導入した。第1章では、本研究の背景や目的、意義を述べるとともに、論文の構成について記した。主要な先行研究において沈黙は、「話し手」や「発話」の視点から分析される傾向があり、「聞き手」とされる沈黙者による行為に焦点をあてた研究が少ないのが現状である。したがって従来の沈黙研究の多くは、相互行為における沈黙の一側面しか議論できていない。以上を踏まえ本章では、「話し手」と「聞き手」による相互行為の視点から沈黙を捉える枠組みの重要性について論じた。

第2章は、本研究が依拠する「語用実践行為 (pragmatic act)」としての沈黙の論考について、Mey (2001)をもとに紹介するとともに、沈黙の位置づけを提示することを目的とした章である。主要な先行研究を概観すると、沈黙を「言語行為論 (speech act theory)」(Austin, 1962; Searle, 1969, 1979)や「ポライトネス理論 (politeness theory)」(Brown & Levinson, 1978, 1987)にもとづき分析している傾向が見られる。これらの理論的枠組みは、異文化間や同文化内での沈黙の使用について比較する際に大きく貢献したと言える。しかしながら言語行為論は、「話し手」の「意図」に焦点があてられた理論であるため(Mey, 2001; Searle, 1969; Sifianou, 1997; Verschueren, 1999)、「聞き手」の視点に立った議論が不十分である。同様にポライトネス理論も、「話し手」に偏重した枠組みであるため(Eelen, 2001; 井出, 2006; Sifianou, 1997)、沈黙が「聞き手」によりどのように「解釈」されたのかについては把握しきれていないのが現状である。だが沈黙は音声に伴わない行為であるため、話し手の意図と聞き手の解釈の間で相違が生じやすい行為である(Nakane, 2006, 2007)。そこで本研究では、Mey (2001)の論考にしたがい、沈黙を「語用実践行為」として捉え直し、話し手に縛られず、相互行為の中で状況づけることにより論じることが可能な枠組みの構築を目指した。語用実践行為は、個々の会話参与者たちが持つ、その状況に対しての理解、

およびその行為がその場で果たしていると考えられる効果によってのみ解釈することができる (Mey, 2001, p. 221)。したがって「話し手」の「意図」のみに言及するのではなく、「その場で何が行われたのか」も考慮に入れることが重要となる。このような考え方は、沈黙を多義的な意味を持つ行為として捉え、より実際の相互行為の場にそくした詳細な分析を可能にする。

続く第3章では、沈黙者が誰なのかについて検討するための基礎的な枠組みとして、語用実践行為にもとづく新たな沈黙の分類を構築した。従来の沈黙の分類として特に会話分析の分野で影響力を持っている Sacks, Schegloff, and Jefferson (1974) や Levinson (1983) による研究では、以下の沈黙の4分類を提示している。

- (1) 「ポーズ (pause)」 (Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974 に依る)
同一話者の発話間に生じる「話者」による沈黙
- (2) 「ギャップ (gap)」 (Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974 に依る)
異なる話者の発話間に見られる、話者交替のための誰にも属さない沈黙
- (3) 「ラプス (lapse)」 (Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974 に依る)
誰も発話をしないために生まれる誰にも属さない沈黙
- (4) 「意識的／限定的沈黙 (significant / attributable silence)」 (Levinson, 1983 に依る)
異なる話者の発話間および同一話者の発話間に見られる沈黙後の発話者による沈黙

この分類は、「話者交替 (turn-taking)」の規則にしたがい、「発言権 (floor)」のやりとりの中で沈黙を捉えており、沈黙者は「話し手」と同義であることが特徴として挙げられる。したがって「聞き手」とされる沈黙者による行為の遂行については、十分に検討されていないのが現状である。以上を踏まえ本研究では、新たに「聞き手」の視点に立つ沈黙、すなわち「ミュート」と「リンガー」を加えるとともに、「意識的／限定的沈黙」(Levinson, 1983) を「ベール」と称する形で、新たに6分類の沈黙の枠組みを提示した。

- (4) 「ベール (veiled)」 (Levinson, 1983 に依る「意識的／限定的沈黙」の修正)
異なる話者の発話間に見られる、沈黙後の発話者が行った沈黙
- (5) 「ミュート (mute)」
同一話者の発話間に生じる「話者ではない人」による沈黙

(6) 「リンガー (linger)」

異なる話者の発話間に見られる、沈黙前の発話者による沈黙

新たな分類により、語用実践行為論の枠組みにもとづき、「話し手」と「聞き手」の両視点から同時に沈黙を捉えることが可能となり、沈黙の多義的な働きを示すことができるようになった。

続く第4章から第6章までの第2部では、沈黙に見られる解釈の多義性について、会話参与者、トランスクリプト作成者、および研究者の視点から分析、考察し、第1部で提案した新たな沈黙の分析枠組みの検証を行うとともに、それぞれの解釈者がどのような解釈枠組みの中で沈黙を捉えているのかについて検討した。第4章では、会話参与者および研究者（筆者）がどのような枠組みの中で沈黙の解釈を提示しているのかについて比較し、共通点と相違点、傾向を明らかにした。本研究の分析データは、研究協力者2名による対話の録画とそれぞれの研究協力者に収録した録画を見せながら個別に行った会話の内容についてのインタビューである。この回顧インタビューで語られた内容をもとに、沈黙が会話参与者によってどのように解釈されているのかについて検証した。一方、研究者による沈黙の解釈は、収録した会話データに対する談話分析の結果をもとに分析した。同一の沈黙について、誰が行ったのか、また何が為されたのかを比較した結果、一致が見られる一方で、不一致することも多くあることがわかった。さらに同じ解釈者であっても、行為者と行為の両方に複数の解釈の可能性を示すことも観察された。加えて、同一の沈黙に対して複数名の解釈者の間で類似した解釈が見られたとしても、それぞれの解釈者が沈黙を捉えるために参照した視点には相違があることが明らかになった。最後に、研究者と会話参与者が沈黙を解釈する際に言及した視点を比較した結果、研究者はデータ中に見られる発話や動作をもとにすることが多いのに対し、会話参与者はそれに加えて、自分の心情、期待、および推測や自分と相手についての背景知識をもとに捉えようとする傾向が見られた。この結果から、個々の沈黙者や沈黙の働きに対する解釈やそれを導くための視点に差異があることがわかった。ただし、沈黙の解釈枠組みは、会話参与者や研究者に関係なく、個々の解釈者を取り囲む状況の中で参照可能な解釈の視点を選ぶという点において共通していた。

さらに第5章では、トランスクリプト作成者がどのような枠組みにもとづき、誰が沈黙者であるのか、また何が沈黙により行われたのかを同定しているのかについて分析を行っ

た。本研究では、はじめに複数の協力者に同一会話に対する書き起こしを依頼した。その際、1度目は音声データのみ、2度目は録画データを示し、2種のトランスクリプトを作成してもらった。これら2種をトランスクリプト・データとし、特に同一の沈黙に対する書き起こしの有無や、表記された長さ、書き起こされた位置の3点に注目し、比較、分析を行った。書き起こしの有無は、トランスクリプト作成者がその沈黙をどのような役割を持つものとして同定したのか、さらに「沈黙」と認定されるものをどのように認識したのかを示す。また記された長さは、どのような基準にしたがい「沈黙」を認定しているのかを表す。これら2点は、沈黙の行為がどのように解釈されているのかについて考える参考にした。加えて書き起こされた位置は、沈黙者が誰であるのかを明らかにする鍵となった。以上3点について比較、分析を行った結果、異なる作成者によるトランスクリプト間および同一の作成者による異なるメディアから書き起こされたトランスクリプト間で3点すべてに違いが見られた。本研究で示された差異からは、沈黙の前後で誰が発話を行ったのか、またどのような形式の発話が行われたのかといった会話データの内容に関する要因だけでなく、トランスクリプト作成者が沈黙の書き起こしに対してどのような規範を持ち、どこに注目し、どのような方法を用いてトランスクリプトを作成するのかといった作成者に関係する要因の影響を受けていることが明らかとなった。したがってトランスクリプト作成者も、彼らを取り囲む状況の中で、沈黙を解釈するための視点を選択することにより、沈黙を捉えていることがわかった。

最後に第6章では、本研究が提示した語用実践行為として沈黙を捉える新たな枠組みのもとつき会話参与者、トランスクリプト作成者、および研究者による沈黙の解釈の枠組みについてまとめるとともに、本研究の問題点と今後の展望について述べた。会話参与者、トランスクリプト作成者、および研究者（筆者）は共通して、彼らがいる状況の中で参照可能な視点を選択することで、沈黙の解釈を導いていることが明らかになった。しかし個々の解釈者が置かれた状況は異なるため、沈黙の解釈に多義性が生じている。従来の「話し手」に焦点化した沈黙の解釈枠組みでは、このような沈黙の様相を捉えることが難しかった。だが本研究は、「語用実践行為論」にしたがい、「話し手」および「聞き手」の両者を沈黙者と位置づけた新たな沈黙の分類をもとに分析を行うことで、より実際のコミュニケーションにそくした解釈を示すことが可能となった。その際、データ内の事象についてのみ注目するのではなく、それぞれの解釈者についても言及することにより、沈黙の解釈が明らかになることが示唆された。